

魔根の王

と  
搾精姫

オ ナ ホ ー ル

FOR ADULTS ONLY

# 魔根の王 と 控精姫

オ ナ ホ ー ル



魔根の王  
と  
捲精姫

『降魔の斬輝』が担い手  
エレオノーラ・ヴィルターリア  
お召しにより参上仕りました

遅かったな  
銀閃の風姫よ

他国の若者のために  
戦場を疾く駆く事は  
出来ても己が王には  
それが出来ぬか

…お戯れを

準備に時間が  
かかっただけに  
ごさいます

…どうか  
ご容赦の程を

独断でプリューヌ領内に  
軍を進めた件に加え  
凍連の雪姫・  
雷渦の閃姫とも  
やりあったそうだな

これらの行為  
真に国益を熟慮した  
上でのものであろうな？

まあよい  
真に我が許しを  
得たくば

わかっておろうな？

さあ  
ジスタートの  
七戦姫が一柱として  
忠義を示すがよい

…はい  
今よじの  
銀閃の風姫が  
淫らな乳房にて  
陛下の逞しき  
御柱にご奉仕を—

何度も言っておろう？

卑しき出自の分際で  
畏まった物言いを  
するでない

もっとそなたに  
相応しい分相應な  
言い方があるう

…陛下のご立派な  
デカチンポ様に…

このだらしない  
エロ乳でご奉仕…  
させていただきます

ククク：  
相も変わら  
ず男好きの  
身体よな

：で  
ヴォルン伯  
爵とやら  
とはもう  
寝たのか？

ツッ！  
い、いえ…  
彼とはその  
ような…

ではいまだ  
生娘のまま  
かならば結  
構、結構！  
この乳穴も  
ワシだけの  
モノという  
わけか？

は…はい  
仰る通り、  
この乳穴は  
陛下だけの  
モノ、です

…俗物め！

身に余る…  
光栄…っ

ふう おおお…ほほ  
主に似て生  
意気な乳よ！

大きさこそ  
光華の耀姫  
に劣れども  
乳壺として  
は甲乙つけ  
がたい…！

誉めてつか  
わす

陛下のお  
チンポも…  
くっ  
：思わく  
ず見反り  
惚返って  
しまい  
そう  
でれす

生娘の乳肉奉仕とは  
まったく趣深い  
ものよな

この眺めを目に  
焼き付けるだけで  
寿命が100日は  
延びる思いだ

おおおお！  
よい、よいぞ  
エレオノーラヴィルターリア

そなたの忠義  
見事と言う他無い！

何が…寿命が延びる、だ  
とどくとくたばれば  
いいものを…ッ

我が身命を  
賭して

陛下の…おチンポ様に  
忠節を、尽くします…ッ

忠義など…  
あるものが！  
誰が好きで  
こんな事…ッ

では褒美をとらす  
うう…  
受け取れいッ！





ウハッ  
ウハッ  
ウハッ

キ  
カ  
ク  
ク  
ク

ウハッ

ウハッ

危うく全て  
搾り取られて  
であつたわ

フフハハ

は

は

まだ  
足りぬ  
忠義が  
ようだな

!?

だが...

ウハッ



594.465

おおお！  
惚れ惚れする豊乳だ  
もしやまた育ったの  
ではないか？  
どうだ、うん？

それでは改めて  
その淫猥な乳肉で  
奉仕して貰おうか

であろうな  
これならばもう  
二年もすればもう  
1アルシンにも  
届くやもしれぬ  
そなたら戦姫の成長は  
王として悦ばしい  
限りである

国王が相手とはいえ  
ごんな辱めを...

31  
40

…ムンギ  
生乳にてのおチンポ奉仕  
ご堪能ください

ふっ…  
んく…  
よいぞ…  
おッ!

生娘のまま…  
とは申したが  
ヴォルン伯爵にも  
この乳くらい  
求められたのであろう?

ブル

ブルブル

たぶら

ぬらぬら

ぬぬ

なんと…  
信じられぬ…  
よもや伯爵は不能なの  
ではあるまいな?

ふ

おん

負けていらいらッ

こんな男に...



お：ほほお！  
必死になつて！  
舐めしやぶりおつて  
そんなワシのモノが  
愛おしいか？

何をバカな...ッ  
こんなコト、早く...  
早く終わらせて...  
私は...ティグルの...  
もとへ





ふくく…ッ  
しかしこうしてみれば  
いかにか強大な力を持つ  
戦姫と言えども  
ただの雌よ



所詮この猥り  
がましい肢体は  
男を悦ばせるための  
モノに過ぎぬか!



ジスタート…七戦姫  
『降魔の斬輝』が担い手  
エレオノーラIIヴィルターリア  
私が捧げるのは…  
あくまで…剣に  
ございますれば…

ほう  
王に口答えとは

だが…  
こうすれば



わ…私…

どうした？  
感じておるのか？

股ぐらから芳しい  
雌の香りが漂って  
きておるぞ？

どうして…  
どうしてこんな…

キッソ

キッソ

しほ

こんな王の…薄汚い  
チンポでえ…っ♡

欲しいのか？  
秘所を我が  
逸物で貫いて  
欲しいか？  
この淫売めが！

だがくれては  
やらん！  
そなたら戦姫は  
王の奴隷！  
王の子を孕むなど  
言語道断ン！

ううう…

こゝんな…ッ  
私の胸を…まるで  
モノみたい…にいッ  
チンポでえぐって…ええ♡

よいぞ、  
よいぞおおオッ  
この滾りを  
受け止めよおオッ



はあ...はあ...ッ  
そうだ、じっくり  
口で、喉で、我が  
子種を味わうのだ





# 乳騎贖辱

忌呪

「それじゃあ、今夜はこのくらいで切り上げるか」

軍議の終了を告げるティグルヴルムドゥヴォルンの言葉に、彼の幕舎に集っていた銀の流星軍の主だった指揮官達は頷き合うとそれぞれ二言三言挨拶を交わして退出していった。テナルディエ侯爵との決戦を前に、奇縁によって構成されたこのブリュヌとジスタートの混成軍も大分大所帯となってきた。各地から集まってくれた騎士団や貴族諸侯の私兵団を統率する団長のみを集めても両の手に余る。ティグルと、彼に助力するジスタートの七戦姫が一人であるエレンことエレオノーラヴィルターリア、そしてその副官リムアリーシャの三人で軍議を進めていた頃とは大違いだった。

元々はブリュヌ北部にある辺境の地アルサスを治めていただけの一小領主に過ぎないティグルには、この軍勢は些か荷が勝ちすぎていた。それでも彼がリーダーとして皆をまとめあげていられるのは、エレンと、それにリムの力に因るところが大きい。特に今はエレンがジスタート王からの急な召還命令を受け不在なため、リムがティグルの参謀として八面六臂の活躍をし何とか銀の流星軍の円滑な進軍を可能にしてくれていた。

「では、私もこれで失礼します」

全員が幕舎から出たのを確認し、明日の作戦のためにまとめた資料を片付け終えたリムは、親しい人間にもなかなか感情を読み取らせない能面でそう告げるとティグルに一礼して背を向けた。頭の片側で結いまとめた艶の無い金髪が翻り、そのままスタスタと幕舎の入口まで淀みなく歩を進めていく。歩き方にすらピシリと芯の通った姿に思わず見とれつつ、ティグルはこの有能すぎる女騎士に声をかけた。

「あー……リム」

「なんででしょう？」

「その……今日も、ありがとう。みんなへの指示とか、俺なんか

と違つて的確で。いつも、助かる。本当に、リムにはどれだけ感謝しても感謝し足りないな」

殊にエレン不在のここ半月ばかりは、リムがいなければ軍そのものが空中分解していたかも知れない。もうすぐエレンが帰ってくるはずだが、その前にティグルは改めて彼女に礼を言っておきたかった。しかし、そんな彼に対してリムは、

「いえ。私は、あくまでエレオノーラ様の留守を預かる身としてあの方の意思通りに職務を遂行しているまでです」

突っ慳貪にそう答えると、振り返りもせず幕舎を出て行った。

だからティグルは気付かなかった。彼女が微かに頬を染め、口端を弛めていたことを。そして外に出た途端、弛めていた唇を引き結んでいつもの鉄面皮に戻つていったことを。

その下士官用の幕舎には、男達のむさ苦しい臭気がこれでもかと充満していた。侍女のティツタが懸命に清潔さを保とうと努力しているティグルの幕舎とは比べるべくもないとは言え、それでも女性のリムにはこの匂いはさすがにこたえる。もともと、戦争中の軍の幕舎など、一部の将官を除けば皆風呂に入るところか満身に汗すら流せないのだから基本的にはどこもこんなものだ。リムとて一介の傭兵だった頃はこういった臭気の中に平然と身を置いていたはずなのに、戦姫の副官という立場に慣れてしまった今となつてはひたすら辛いだけだった。そんな今の己の立場を兵達に申し訳ないと感じつつも、将官ともなればただ前線で剣を振るうだけでなく戦場にあつても他国や敵軍の使者と接する機会があるため不潔にしておくわけにもいかない。リム自身は、過去と現在の境遇の違いをそこで割りきっている。

あくまで、リム自身は。

「よう、遅かったじゃないですかリムアリーシャ殿」

幕舎に入った途端、そう声をかけ気軽にポンと肩を叩いてきたのはリムよりも幾らか歳上の、二〇代も半ばくらいの騎士だった。

「……申し訳ありません。軍議が少々、長引いたものですから」



「とか何とか言つて、戦姫様が留守なのをいいことにヴォルン伯爵殿とイチャついてたんじゃないんですかい？」

奥で胡座をかいていた年嵩の騎士が呵々とからかう。リムは特に反論もせずに幕舎の中央まで歩を進めると、鉄面皮を崩さぬままグルリと周囲を見回した。

(今日は……昨日よりも多いですね)

幕舎の中にはライトメリッツの騎士が十五人ばかり。他に外にも数人いるようなので合わせれば二〇人と言ったところか。

捌ききれない人数ではないが、あまり時間をかけすぎても明日に差し支える。なるべく迅速に終わらせてしまわなければと短く嘆息し、リムは普段から露出の多い軍装に手をかけると、惜しげもなくその豊満に過ぎる乳房を外気に晒した。

「おお、やっぱでけえなあ」

「そのくせまつたく垂れちやいない。奇跡的なデカパイだ」

とうに見慣れているだろうに、騎士達から下卑た賞賛の聲がある。その事で今さら何の感慨が湧くはずもなく、リムは細めた眼に怜悯な光を宿すと、目の前の騎士に一言「どうぞ」と無機質な声をかけた。

「やれやれ、リムアリーシャ殿。その辺は変わりませんな」

「もつと男が悦ぶよう台詞も工夫しませんと、どれだけ戦上手を誇ろうとも意中の相手一人落とせませんぞ」

「そうそう。ティグルヴルムド卿にも愛想を尽かされ——おっ」

浴びせかけられる擲擧に眉一つ動かさず、騎士の下衆な言葉を遮ってリムはこれも慣れた所作で彼のズボンを脱がすと、隆々と猛りきつている肉棒を取り出した。耳障りだ。これ以上は聞いていたくない。特に、今この場で彼らの薄汚い口がティグルの名を轉るのは理由は定かではないが不愉快だった。

臭い。幕舎内に漂う男達の匂いをさらに凝縮させた濃密で醜えた雄の淫臭が肉棒から漂い、鼻腔から脳までも満たしていく。クラクラと目眩を覚えつつ、それでもリムは気丈に彼らを見回すと、「無駄話をしている時間が惜しいです。……本日も、皆様の遅しくご立派なおチンポ様に、私リムアリーシャの猥りがましく生意気なエロ乳で精一杯ご奉仕させていただきます。どうかよろしく

お願いします」

決まり切ったいつもの定型文を一言一句過たず言い放った。

娼婦ですらも口にしないであろうなんとも馬鹿げた文句。騎士達に命じられるまま毎回このくだらない台詞を読み上げるのは、リムにとつてある種の儀式だった。普段の自分と、この領域に沈みゆく哀れで無様な自分とを一瞬で切り替える、魔法の言葉。淫靡な自分を喚び覚ます、忌まわしく浅ましい姦婦の呪文。

「へへ、じゃあ今日は俺からだ。早速頼むぜえ、リムアリーシャ殿……ツとお！」

「ン、くっ……ふ、くっくっくっ」

ズブリ、と勢いよく肉槍が爆乳の悦孔へと突き立てられる。ろくに濡れてもいないはずなのに又チャリという滑った感触がしたのは、騎士の男根に付着した大量の恥垢、それにリム自身の汗によるも不潔なぬめりだった。

(先程まで、厚着をして……暖かいティグルヴルムド卿の幕舎にいたから……思つたより身体中、汗が……)

ここブリュー又は、ジスタートと比べ冬でも比較的温暖な国だ。うっかり祖国と同じつもりでいると汗だくになってしまう事もままある。恥じらいがないわけではなかったが、どちらにせよこれからまた汗はかくのだからとリムは粘ついた乳谷に視線を落とす、さらに滑りを良くするためにたっぷりと唾を垂らした。

「んっ、ふむ……ちゅっ、くちゅ……ふ、うう……、……では、チンポ抜き、始めます……ツ、う、ああ……」

わざわざ断りを入れてから、ゆっくりと上半身を前後させる。爆乳ですっぽりと男根の先を包み込んで扱く、所謂縦パイズリというやつだ。『まるで女陰とまぐわっているようだ』と殊更この奉仕を好む騎士は多い。

(……男性器の熱が、胸にじんわりと広がっていく……ンッ♥) 甘い刺激が乳谷を内側から圧迫し、脳髓を痺れさせる。知り尽くした感触、知り尽くした熱さ、知り尽くした汚臭であるはずなのに、圧倒的な雄の存在感に乳房を嚙られる情撃は斯くも容易くリムの女を目覚めさせる。或いは、知り尽くしてしまつたが故の抗えない雌の反応なのかも知れない。もはや身体に深々と刻まれ、

染み込まされてしまっている。猛々しい男根から豊満な乳房へと  
もたらされる、蕩ける肉悦を。

「ふ……っ、く……ン、……は、……あ、ふう」

「おおお……いいぜえ、たまらんキモチ良さだ。よくもまあ乳  
房をこんな下品に使いこなせるものだと感心してしまうな」

そう仕込んだのは貴方達ではないですか、などと今さら口にし  
ても詮無い事だ。リムは上目遣いに騎士の恍惚顔を一瞥すると、  
乳挾奉仕へと意識を集中させた。

（匂い……日増しに、酷くなっていく……ンッ♥ 頭の奥までツ  
ンと抜けていくかの、ような……なんて汚らしい、不浄な匂いな  
のか……ふ、く……はあ）

芳しい淫臭と、男性器から伝わる熱、激しい脈動に胸の疼きが  
止まらなくなり身も心も昂ぶっていく。かつては嫌悪しか湧かな  
かったはずの行為にこんなにも発情してしまう浅ましい自分を見  
たら、エレンやティグルはどう思うだろうか。

（ですがこれも……仕方のないこと、ですから）

そう、仕方がないのだ。エレンもリムも元は同じく一介の傭兵  
でありながら、戦姫として選ばれた者とそうでない者の間には大  
きな隔りがある。だからリムは、妹も同然に育った親友を“エ  
レン”と呼ぶのをやめた。“エレオノーラ様”と呼び敬い、彼女  
が戦姫であり続ける限り部下として忠誠を捧げようというその誓  
いのためには、副官として取り立てられた成り上がり者への反発  
をこうしてどこかで受け止めなければならなかった。それに、捕  
虜の要請を受けて隣国へ派兵され、命懸けの戦いを強いられる事  
への不満にも捌け口は必要だった。騎士達の不平が、不信が、エ  
レンに向けられる事だけはなんとしても防がねばならないのだ。  
それに今は、銀の流星軍のリーダーたるティグルへもそういった  
感情が集中するのは避けなければならなかった。

（このくらい、どうということはない）  
「もつと……激しくします」

「おぐっ、おおおっ!?」

前後運動を加速させ、さらに両側から手で圧迫し淫狭の乳圧を  
強める。自らの指を柔肉にきつく喰い込ませて揉みしだきながら

の乳姦抽挿は、素早く男を射精へと導ける代わりにリム自身も気  
を抜くとあつさり気をやっつてしまいたいそうになる諸刃の剣だ。

「はあ……ンッ、ンン、く、ふう……あつ、あ……っ♥」

乳房を中央に寄せたことで先端の突起が肉エラと擦れる。甘美  
な快感に思わず甲高い雌声をあげてしまいい、羞恥からリムは唇を  
引き結ぼうとして、しかし出来なかった。

（おか、しい……今日はいつもより、胸……敏感に……ッ！ア  
レが擦れる度に、ゾクゾクと……背筋が、う……あ——）

理由を探り当てようとした刹那、リムの脳裏をよぎったのは赤  
毛の少年の笑顔だった。『今日もありがとう』『いつも、助かる』、  
そう言ってくれた彼の、ティグルのことを考えると正体不明の感  
情が胸の内に湧き起こり、そこを乳悦の官能に直撃される度に全  
身が跳ね上がりそうになる。

「くっ、う……んきゅっ♥ は、あ……あんっ、アッ♥」

嬌声を堪えきれない。肌は艶めかしく上気し、玉汗がその表面  
を色っぽく伝う。うっとり息を吐き、汚臭ごと吸い上げる。そ  
の都度例えようもない法悦が全身を震わせ、脳には薄もやがかか  
り、リムは乳姦に酔いしれた。

「……なんだ？ 今日随分と色っぽい声を出しなさるじゃねえ  
か。なあ、リムアリーシャ……殿ッ！」

「ひぎゅううううううううううううっ♥」

猛烈な突き上げ。乳孔の最奥、心臓を貫かれたのかと思わず錯  
覚しそうになる程の衝撃が形良い柔肉に波を打つ。

（そっ、そんな勢いよく胸に、男性器を……っ、チッ、チン……  
ポお♥……チンポを、突き刺されては……あああっ♥）

蕩けてしまう。快楽に。あろう事かティグルの面影を追いなが  
ら、騎士の剛直で雌悦にあられもなく喘いでしまう。その卑猥な  
気に当てられたのか、大人しく順番待ちをしていたはずの騎士達  
が辛抱たまたらんとばかりに雄々しく怒張した肉棒を次々とリムの  
爆乳へと突き立て始めた。

「くっ！ おい、もうちよつと脇に寄れ！」

「あのリムアリーシャ殿のこんなドスケベッラを拝みながら我慢  
などしていられるか！ 俺も使わせてもらおうぞ！」

「まっ、待ちなさい……！　せつ、せめて順番を、守って……い  
ああっ♥　おぐつ、ふ、くふうういいいいいいイイツ♥」

四方八方から押し寄せる獣欲の群れがいきり勃つ剛直を滅茶苦  
茶に乳房へと突き挿し、擦りつけ、揉み馴れていく。乱暴に歪ま  
された爆乳は、強烈な雄の本能によって蹂躪されることの悦びで  
一層敏感さを増し、リムの口から艶叫を迸らせた。

（チンポがっ♥　吐き気がするくらい臭くて、醜く血管を浮き上  
がらせ脈動している凶悪なチンポの群れが襲ってくる……っ♥  
私の、騎士には不要なだけのこの大きな胸に興奮し、欲情して、  
……先走りをつと口と溢れさせ垂れ流しながらぶっくり膨れた  
龟头を押し当てて嬉しそうにビクンビクン震えているっ♥）

こんな時に連想すべきではないのに、リムの頭にはかつてライ  
トメリッツの井戸で水浴び中のテイグルと偶然遭遇してしまった  
際に目にした、彼の隆々たる男性器が思い浮かんでいた。

（テイグルヴルムド卿も……彼らのように、女性の……大きな乳  
房に、劣情を催したりするのでしようか？　私の、この……イヤ  
らしい胸を見て、……チンポを、勃起させて……ー……っ♥）

「はくっ！　うつ、くひいインツ♥　はっ、あっ、や……あく！」

お人好しで純朴なテイグルの人柄とは似ても似つかぬ肉の凶器。  
騎士達の逸物と比較しても一回りは大きかった、アレで乳房を突  
き刺されたらと想像しただけで雌芯が疼く。これが本当に自分の  
内部から湧き上がる情動なのか、信じられない。我ながら気が触  
れているとしか思えなかった。発情した雌の猥りがましい浅まし  
さが、雄を欲して止まらないのだ。

「ふう、あむっ♥　ん、くひゆ、……ちゅむうううっ♥」

「ぐおああっ!?　チンポがおっ、押し潰される！」

「リ、リムアリーシャ殿、激し……あああっ!!」

射精。胸に突き立てられていた幾本かの男根がビュルビュルと  
汚らしい音を立てながら盛大に濃精を解き放つ。

「はああっ♥　……ん、ぢゆる、ぬちゆるる……ンツ♥　……フ、  
フ、フフ……んむ、ふああ♥」

苛烈に、貪欲に。乳房を巧みに操り騎士達を責め立てたリムは、  
彼らの吐精した汚濁を浴びてうっとり目を細めた。大量の精液

が双丘を、顔を、髪を汚し、それでも騎士達はまだまだいる。リ  
ムの爆乳を犯し尽くすまで彼らはその動きを止めないだろう。そ  
れが今は、たまらなく嬉しかった。期待に胸が高鳴り、頬の弛み  
を抑えることが出来ない。

「……もっ、と……ンンツ♥　好きに、してください。私のこの  
淫らなデカ乳を、チンポで……犯して……汚して……はあ♥　も  
う、どうなってもいい……です、から……ああ♥　私は、私……  
ふあっ、あ、お……チンポお♥　んむっ、ぢゆるるるっ♥」

テイグルの顔が、エレンの瞳が、瞼の裏に浮かんで消え、ま  
た浮かぶ。彼らのために、そう言い聞かせながらリムは胸に挟ん  
だ野太い男根をキツく締め上げ、乳首でカリ首や裏筋を擦り、押  
しつけられた龟头を乳肌の柔らかな弾力で押し返した。

「くっ！　お、俺ももう……ぐ、ああああ射精るっ!!」

「き、今日のリムアリーシャ殿は……本当に凄いで、我らのキン  
タマの中身を全て搾り取る気満々ではないか！」

果てていく騎士達の悲鳴が耳に心地良い。もつと、もつとと強  
く求めれば求めただけ、彼らの獣欲は応えてくれる。それはリム  
の女の悦びを燃え上がらせ、爆乳奉仕を一層激しくさせた。

「ええ……うっ、ああっ♥　……全て、……貴男方の、そのパン  
パンに膨らんだキンタマにたつぷりと詰まった濃厚な精液、全て  
搾り取って……あげます、から……ンツ♥　どうぞ、遠慮なく、  
この胸にチンポ……チンポを、お、おとおおおっ♥」

乳姦淫悦に身体が仰け反りそうになるのを必死に堪え、リムは  
新たな射精を乳壺で受け止めながら微笑を浮かべた。この汚れが  
エレンに勝利を、栄光をもたらす糧となるなら安いものだ。テイ  
グルはブリューヌの内乱を平定し、救国の英雄となるだろう。そ  
れがたまらなく嬉しい。嬉しくて、キモチ良くて、意識が官能の  
底無し沼に沈み込んでいく。

精液まみれのたわわな乳肉を絶頂に弾ませ、リムは自らを包む  
汚泥の如き多幸福感に浸り、めくるめく快感に蕩けていった。



# あとがき

はじめましてこんにちは。寒天と申します。

2014 秋アニメのおっぱい枠として見始めた『魔弾の王と戦姫』ですが、  
ためしに原作小説を買ってみたところ、思いのほかハマってしまいました。  
原作は明らかにおっぱい要員より男性陣のほうが目立っていますが。  
今回はエレン本になりましたが、機会があればまた他の娘も色々と  
描ければうれしいなあと思っています。

あの世界のおっぱい基準は貧乳扱いのリュドミラちゃんも

どう見てもそれなり豊かなおっぱいなのが嬉しいですね。

シースルーのスカートのせいでパンツが常に丸出しなのもいいですね。

それでは。

# 奥付

誌名	: 魔根の王と搾精姫
発行者	: 寒天
発行サークル	: 寒天示現流
発行日	: 2014/12/30
印刷所	: くりえい社様
WEB	: <a href="http://kantenjigenryu.sakura.ne.jp/">http://kantenjigenryu.sakura.ne.jp/</a>
ゲスト小説	: 忌呪様 黒色彗星帝国 ( <a href="http://imiju.jp/">http://imiju.jp/</a> )

※18 歳未満の方の購入を硬く禁じます。



魔根の王  
と  
搾精姫

2014.12.30  
寒天示現流